

星宮神社
「星宮神社 村の鎮守なり」(日光道中略記)とある下石橋村の総鎮守。境内には八坂大神、高尾大神、稲荷大神、八幡大神4社が合祀されている。宝治2年(1248)10月創建という。



下石橋北交差点



星宮神社入口道標

高さ10尺の石柱



夕顔橋の石仏群
レストラン倉井から途切れていた旧道沿いにある。国道4号と国道352号線の交差点の手前にあり、享保3年(1718)銘の地藏菩薩立像や延享4年(1747)銘の十九夜塔など10体の石仏が祀られている。

石橋の神輿
お祭りに欠かせないのが神輿だが、ここ石橋町の神輿は全国的にも有名。栃木県指定無形文化財保持者でもある小川政次氏の手による御神輿・彫刻山車などが、県内はもとより全国的にも出荷されている。

庚申塔に刻まれた像
青面金剛、猿田彦大神、大日、阿弥陀、薬師、地藏、不動、山王、帝釈天、観音、道祖神像、仁王、閻魔、一猿、二猿、三猿
文字だけの場合は庚申・庚申塔、庚申供養塔二世安楽、庚申供養、庚申供養塔、青面金剛、青面王、猿田彦大神、猿田彦命、庚申尊、岐神、大田神、寒神、幸神・孝神、百庚申(号名、題目など)
形式は板碑型、光背型、板状駒型、駒型、山状角柱型、笠付型、丸柱型、立体丸彫型、自然石型などがある。



右に「倉井」突き当たりを右へ



旧下石橋村
最初宇都宮領で元禄8年(1695)壬生藩領となり、文政年間(1818~1829)に壬生藩領と下総佐倉藩の相給地となる。天保年間(1830~1844)は22軒の家があり、立場と高礼場があった。村の前後の街道には松並木があった。

49 小金井宿 ~ 石橋宿
栃木県下野市
倉井 ~ 下石橋北
(歩行距離 1834m 22分)
歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
JZE00512@nifty.ne.jp

石橋の地名(N050石橋駅近くに記載)
「村名の起りも詳かならざれど、むかし池上明神前の水流に石橋あり。今は土橋なれども土人は石の橋と唱ふ。これ村名の起るところなりとぞ」また、「此村(下石橋)旅人の憩所にして、石の立場ともいふ」(日光道中略記)
かつて街の南端を流れていた川と現在の国道4号線が交わるあたりに、石造りの橋があった。
「下石橋にいたれば千里軒の馬車の立場あり」(上野下野道の記)江戸時代は駕籠、明治時代には馬車と、手段は変わっても交通の中継地は同じだった。



このあたりが「下石橋の一里塚」?

23 下石橋一里塚
日本橋から23番目の一里塚。この一里塚は失われてたと思われていたが、最近の調査で国道4号線西側の雑木林の中に西側の塚が残っていることが確認されたが、確認できず。日光・奥州・甲州道中宿村大概帳に「木立杉、但し、左右之塚共下石橋村地内」とある。

上三川町(かみのかわまち)飛び地になっている。地名の由来は、当時の河内郡内にあった三川郷に由来するものといわれている。また、「上三川」で「之」をくずして書くと「三」に見えるので「上三川」と書くようになったという説もある。

日光街道はここを通っていたが、道は笹藪で遮られ通れない。T字路になっているので、右に曲がり国道に出る。
今までのんびりした道が右のレストラン倉井を過ぎると木に覆われ行き止まりになる

庚申塔
人の体内にいる三尸の虫が、60日ごとに回ってくる庚申の夜、天にのぼってその人の罪過を天帝に告げるため生命をちぢめ良し留、とする中国の道教の教えがある。庚申の夜には眠らずに現行をつつしみ、健康長寿を祈念する信仰遊戯が行われることとなった。
道教の信仰が底流にあり、これに仏教的な信仰が加わって、室町時代には、庚申待をする講が結ばれ、月待ち講による供養塔建立に変わった庚申造立が始まる。庚申待の行事や庚申塔造立は、人の延命招福にあるが、村の講中のものが徹夜で飲食をとることから、村民の連帯につながった。
江戸時代には、造形的に多様な類形をとって沖縄を除く全国各地で造立されることになった。路傍の石仏の中で最も親しまれ、現在も庚申講が維持されているところもある。室町時代の庚申待板碑には阿弥陀を本尊とするものなどがつくられるが、江戸時代には、悪疫を調状する青面金剛や、道案内にかかわる猿田彦神などを本尊とするようになった。青面金剛の神使である猿が彫られるのは、見ざる、言わざる、聞かざるという謹慎態度を示すためである。
日月(にちげつ 太陽と月)・鶏・邪鬼を彫刻するものもあり、日待月待信仰、魔性を圧状する意味からきているものといわれている。庚申塔の造立を月別に見ると、11月が断然多く7月が最も少ない。村や集落の出入り口にある。
庚申塔の時期的変化 江戸前期のものは、庚申講の結衆の名、舟形、猿だけが刻まれたものが多い。寛文、延宝頃までに造立された。江戸中期のものは、青面金剛が刻まれる。豪華で飾りたいそうにぎやかになる。元禄前後から享保頃に造立された。江戸後期のものは、角形、自然石型が増加する。簡略化され、文字だけのものも多くなる。文字そのものにも工夫があって興味深い。
刻まれた像は青面金剛、猿田彦大神、大日